

四月を迎えて、

先生に望むこと



津 守 真

幼稚園・保育所は、幼児教育のことをいちばん専門的に考えるところ

このごろとくに感ずることの一つは、子どもが幼稚園にゆく期間
はほんとうに短いなことである。二年保育の場合でも、最初
の年はじめての集団生活になれさせるのに過ぎてしまつて、二年
目には、もうじき学校だといふ気分的なあわたしきがある。うか
うかしている、幼稚園を通りすぎたといふだけで二年間を終つて
しまふ。まして一年保育の場合だつたら、先生にとつても子どもに
とつても、親にとつても、ほとんどお互いにとつてもかわす間もな
く過ぎてしまふだろうと想像する。入るあわたしきと、出るあわ
たしきだけで、幼児期の教育をいちばん真剣にとりくんでくれる
場所と別れを告げるのは、何か心残りのような気がする。学校に入
つてしまへば、年令的には幼児の域を脱しなくても現在の学校教育

の枠の中では、幼児教育の実を上げることではできないだろう。また
家庭は幼児期の教育を考えるにはあまりに忙がしすぎる。兄弟や弟
妹のことも考えなくてはならないし、それは年令の違った子どもで
ある。一つの家庭の中で兄弟が共存してゆく人間関係を学ぶのには
良い場であるが、その子どものもついろいろの能力を伸ばしてやる
のには最善の場ではない。また親は幼児教育の専門家でもない。た
とえ一人子で親がそれにかかりきることができたとしても、親対一
人の子どもの中では、かえつて親の手がかりすぎたり、期待が大
きすぎたりして、子どもの心の奥にある要求を見逃しがちである。
こう考えると、幼児期の教育のことをいちばん専心に専門的に考
えてくれるところは幼稚園や保育所以外にないのである。しかし幼
児がそこに通う期間は短かくて、入つたと思つたとちまち送り出さ
ねばならないのである。よほどはじめからそのつもりになつて、計
画を立て、本腰をいれてかからないと、ただ目を過ごし、忙がしく

しただけになってしまふだろうと思う。

「計画を立て」と言ったが、これは幼児教育の場合にも非常にたいせつなことである。計画を立てるか立てないかによって、ある期間に何かができるかできないかがきまるようなものだからである。

もちろん、ここで私が計画をと言っているのは、どんな歌を何月にやつてというようなことではない。卒業までの二年間の毎日の歌や遊戯、お話や製作などをきめて計画的に実行するというようなことではない。そんな具体的なことをこまかくきめてしまったら、先生も子どもも身動きができなくなってしまうに違いない。あせりと失望と、不安と劣等感が残るだけであろう。計画を立てるということは、そこで結局何をしようとするのかということ、できるだけ根本的に考えるということからはじまる。そこが解決がつけば、半分はできたのも同然である。幼児期のいちばんの花である幼稚園期、そのときに幼児教育者は何をすればよいと考えるだろうか。一つのクラスを受けもつ先生はその期間に何をしようとお考えになるだろうか。まずそこから考えなくてはならないし、またこれはたえず問いつづけながらゆかなければならないこともある。私はいまこの答えをすぐにここで割りきつて出そうとは思わない。ただ、そこから出発して保育をすすめておられるところでは、たとえ考え方が多少違っても、同じことをやっているようにみえても、なるほどどうなずかさされるものを感じる。何何主義というような大げさなものではなくて、子どもの生活を理解して、よく考えながら保育する

ことの重要さを思うのである。

幼稚園・保育所を幼児の生活にふれるもの とすること

幼稚園の生活は子どもにとって全部ではない。だいたい子どもの生活の半分と言ってよいだろう。だから、あとの半分为幼児として快適な状態で過ごしている場合と、不満があつて過ごしている場合とは、幼稚園生活の位置づけがやや異なってくる。家庭で友だちと遊ぶ機会をもち、遊ぶ場所をもち、自分を發揮して十分に遊ぶことのできている場合には、子ども自身にとって幼稚園に期待するところは少ないのかもしれない。また、幼稚園はただ通りすぎるだけのものでも耐えられるかもしれない。しかし家庭に帰つても、遊び場もなく、精神的不満があり、十分にたのしい生活をしていない場合、幼稚園のもつ意義はもっと深刻である。保育所の場合には子どもがそこで過ごす時間も長くなり、ほとんど子どもの生活の全部を占めることになるから、子どもの人格形成に及ぼす影響はもっと大である。いずれにしても、幼稚園や保育所は子どもの生活領域の一部分だけを扱かうのではない。たとえば、音楽だけを教えるところでもないし、お話だけをすることもない。またしつだけをするのでもない。また、音楽とお話と、製作と観察と、そういうものをよせ集めただけのものでもない。幼児にかぎらず、人間の生活はいろいろの仕事のよせ集めではない。一人の人の生活の中には、

喜びもあり悲しみもあり、生活の目標もあり思想もある。おとなの生活ではこういうものは自分の生活として心の中にかくして、社会生活をしながらも、個人生活を保つことができる。しかし幼児の場合には個人生活と社会生活、集団生活のつかいわけをすることができない。幼稚園の生活の半日の中に、感情もあり仕事もある。まして保育所の一日の生活の中には子どもの生活のすべてがある。その生活の中で、幼児がたのしむことができ、生きがいを感じることができなければ、それ以外に生活の張りが出てこないのである。ここに幼児教育の大きな特色がある。

だから、幼稚園や保育所では、子どもの生活感情を尊重しなければならぬ。まず子どもが、そこで、自分自身しっくりした気持ちをもって生活ができなければ、その他のことははじまらない。入園する子ども一人ひとりがそれぞれ異なった生活経験をしてきている。先生は子どもの一人ひとりを理解し把握するのに時間もかかる。最初の二、三カ月はこのためにだけ費してもよいし、その間にすべての子どもがそれぞれ自分のペースで幼稚園の生活ができるようになるれば、たいしたものだと思う。だから、この期間は、一日の生活の時間割の中には、歌があり、製作があっても、そこで目指していることは、子どもの一人ひとりが幼稚園生活を自分のものにするこゝとができるということであって、歌をいくつ覚えられるか、製作がどれだけ上手にできるかということではないのである。生活を自分のものにするということは、満足して生活しているということであ

る。また、自分はいまこのことをしているのだという充実感もっていることであり、さらにすすめば、明日はこんなことをしようという目標をもって生活することである。指導の側からいうならば、子どものやっていることにたえず干渉しないということ。全体と歩調をそろえるためにいそがされたり、批判されたりしていたら、子どもは自分がこのことをしているのだという意識がなくなってしまう。子どもが明日はこんなことをしようと思つてきたのに、子どもがやろうと心に思っていたことが先生に理解されず、おとな式の考えですすめさせられてしまったときの子どもの気持はみじめなものである。たんに子どもの気持があわれただけでなく、このような意気ごみこそ、創造力を伸ばす契機であり、もっとも効果的な学習の場であることを強調したい。

先生の立場に立つと、何かをやらなければならぬというあせりが出てくる。そのあせりはわるいものとは言えない。けれども、それをあれこれの歌やお話でつめこんでしまつて、幼児教育をしているのだと安心してしまつてはいけない。一人ひとりの生活にふれてゆかなければ幼児の指導はできないのである。何か形のととのったことをやることを考えないで、子どもの一人ひとりをのみこんでほしい。そして一人ひとりにまず十分に力を出せるように、幼稚園の生活にゆとりをもたせてほしい。それでないと、どんなに多くのことをやらせたにしても、幼稚園は子どもの生活にとつては遠く離れた、意義のないものになってしまうのである。